

---

# みみがり

水色ペンキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みみがり

### 【Nコード】

N4066D

### 【作者名】

水色ペンキ

### 【あらすじ】

天文五年（1536年）、周防長門の大内家が行った九州攻めに従軍し、狡猾な方法で大手柄を挙げた男がいた。だが、因果は報いる。

「で、こりゃ負け戦だと思つてな、俺あさつさと逃げ出した。死んじまつたら元も子もねえ。身重のおめえを残してよ、俺だけ先にくたばつちまや、あの世で夢見が悪いつてな。そうなりやおめえも権造の爺いに手えついて、苦いもんでもしやぶらねえとよ、この世で生きてもいかねえだろうしなあ」

「いやだよ、あんた、やめとくれよ」

天文五年（1536年）、ここは長門の片田舎。時あたかも戦国の緊張が入道雲のように湧き上がり、日本全土に暗い影を落とし始めたころであった。周防長門の国主であった大内義隆は、海峡を越えて西海道に攻め入って、幾多の勝利と敗北を経験しながら、数年をかけて北九州一帯を平定した。戦の主力は長槍を持った農民兵である。この家の主も、田畑を措いて戦に駆り出された不幸な男の一人であった。だがこの男はまだ運がよいほうだ。こうして生き残り、妻とともに再び囲炉裏の炎を囲めたのだから。そしてもうひとつ、男には幸運があった。

「藪に隠れたが、敵が多くて出られねえ。仕方ねえから這いつくばつてずっとそのまま待ったのさ。しばらくしたら物音が減つてよ、そーっと首を上げてみたら、誰もいなくなっていた。みんなどっかにいつちまったのさ。でふと見たら、そこら中に死体、死体、死体さ。しめたもんだ。いつ誰が来ないともわからねえ。俺あそーっと槍の先を持つてね、こう、死人の耳をよ、ざっくり、ざっくり斬り始めた。刃のそこをここに当てて」男は指でこめかみを叩いた。「片手で横から押さえてな、柄のそこを足で踏み込むんだ。すとん。あつというまに二十個よ。大した手柄さ。死人の巾着を頂戴して、ぱんぱんに詰めて逃げ出した。そしたら籠造寺の軍が助けにきてな、気づいてみれば勝ち戦さ。で、こうなつたんだ」

男は懐に手を入れて、床板の上に銀の粒をばらまいた。妻は目を見

張った。こんな大金、生まれてこのかたお目にかかったことがない。  
「喜べ。これで俺たちもちよつとはいいい暮らしができる。安心して  
やや子を産めよ」

「あんた、あんた…… 本当にあんたは日本一の男だよ。あたい男の  
子を産むよ。名前、考えとくれよ」

「そうだな、芳一、芳一なんてのはどうだ」

「いい名前だね、それにしよう。きっと丈夫な子になるよ。あたい  
幸せだよ、あんた」

産まれた子は盲目であった。親が死ぬと、芳一はたちまち食え  
なくなつた。路頭に迷つた幼い盲者を、ある寺の和尚が拾い上げた。  
そしてこの子が、のちに、あの

耳なし芳一となる。

(あくまでフィクションです)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4066d/>

---

みみがり

2010年10月14日16時52分発行